現在の就学前教育における「10の姿」の取り扱いに関する一考察

A Study on How to Cultivate “Ten Points” in Pre-School Education

泊　明希佳
Akika Tomari

はじめに

我が国では、2017年の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下３法令）の改訂により、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」）」が示された。このことにより、幼稚園、保育所、認定こども園（以下３施設）の保育者や教師と小学校の教員とで、卒園を迎えるまでに育ってほしい姿を共有するなど、就学前教育と小学校教育との接続が一層強化されるようになった。小学校との接続が強化されるようになった理由として、３施設と小学校教育との生活の変化に子どもが対応できず、その結果引き起こされる「小１プロブレム」や「学級崩壊」などの問題が挙げられる。そのため、生活の変化に子どもが対応できるようになっていくことも学びの一つとして捉え、保育者や教師は適切に関わっていくことが必要である（文部科学省、2017）。

その際、保育者や教師は「10の姿」とは、幼児期にふさわしい生活をすることによって見られるようになる姿であることに留意していなければならないと文部科学省（2017）では述べられている。先述したように、３施設と小学校では、子どもの生活や教育方法が異なるため「10の姿」からイメージする子どもの姿に違いが生じることもある。そのため、３施設と小学校は連携を図り、子どもの姿を共有できるようにすることが大切である。そのためには、保育者や教師は就学前教育を通して見られる子どもの姿を具体的に捉え、子どもの成長を分かりやすく伝えられるようにする必要がある。さらに、保育者や教師は、遊びや生活の中で子どもが成長していく姿を「10の姿」で捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるよう環境を整え、必要に応じた援助が求められている（文部科学省、2017）。

しかし、子どもの姿を「10の姿」で捉えるとは具体的にはどのようなことであろうか。「10の姿」が３法令で明示され既に４年が経過しており、３施設においても一日の振り返りを「10の姿」で捉

える、子どもの活動を写真に収め、その写真からどのような「10の姿」が育まれているかを保育者や教師間で話し合うといった取り組みがなされている。しかし、これらの取り組みに対しては各園によってばらつきがあるため、今後は各園間での共通の取り組みがなされ、合同の研修の機会が多くもたれるようになるといった工夫がますます期待される。

そこで、本稿では就学前教育が「10の姿」をどのように実現しているのかについて検証していくことを研究の目的とする。なお、本稿の構成は以下の通りである。第１章では現在の就学前教育について論じ、第２章では「10の姿」の取り扱いや従来の５領域との関連性について論じていく。第３章では、３施設での活動の「10の姿」の視点から遊びの分析を通して得られた結果を示し、考察を行う。最後に、第４章では全体を通したまとめを行う。

第１章　現在の就学前教育

この章では現在の就学前教育について論じる。無藤（2018）は、就学前教育は子どもが生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであるという観点から、３法令の中でも共通してその重要性について述べている。このことは、就学前にどの施設に通うかにかかわらず、子どもの育ちが小学校教育を経て、さらにはその先にある教育と生涯を通しての成長の土台として不可欠であるという認識が確立したことを示している無藤（2018）。また、2017年の３法令改訂では新たに「10の姿」が明示されており、同時に「幼児期において育みたい『資質・能力』（以下「資質・能力」」も示された。「資質・能力」とは、乳幼児期だけでなく、小学校以降へと育っていく子どもの育ちの根幹をなすものである（無藤、2018）。一方「10の姿」とは、就学前教育修了時までに育ってほしい具体的な姿である（無藤、2018）。また「10の姿」とは、乳幼児期のそれぞれの時期でふさわしい生活を展開することで、幼児期の終わりまでに育ちへとつながるものであると無藤（2018）は述べている。「幼稚園教育要領（2017）」では、幼児期のふさわしい生活とは「教師との信頼関係に支えられた生活」「興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活」「友達と十分関わって展開する生活」であると述べられている。さらに、今回の改訂では、保育所保育指針の乳児期の子どもに関する記述が増えており、乳児期から幼児期への育ちの連続性に加え、小学校教育への見通しをもった教育の積み重ねの重要性が明示されている無藤（2018）。このことは、子どもの育ちを長期的な視点で捉えようとしていることを示唆している。就学前教育と小学校教育との間に連続性があれば、生活の変化への戸惑いから子どもが引き起こす「小１プロブレム」や「学級崩壊」といった問題の解決にもつながる可能性がある。そのため「10の姿」は、就学前教育と小学校教育との円滑な接続のためにも必要なものであると考えられる。これまで、小学校側は就学前教育での成果を受けて小学校教育を始めようとしても、教育理念も異なる多種多様な園から入学してくる子どもたちに対して、就学前教育での育ちのどの部分を基にすればよいのか分からないという課題が、就学前教育と小学校教育との円滑な接続を妨げる一因となっていた。しかし「10の姿」が明確にされたことで、今後は就学前教育の共通化が図られ、受け入れる側の小学校も育ちつつある姿を期待するとともに、小学校教育でその

表１　３法令第１章の比較（原文より抜粋）　※下線部は筆者が加筆

幼稚園教育要領（第1章　第1）	保育所保育指針（第1章　1（1）イ	幼保連携型認定こども園教育・保育要領（第1章　第1-1）
（前略）幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。	保育所は、（中略）子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護と教育を一体的に行うことを特性としている。	乳幼児期の教育及び保育は、（中略）乳幼児期全体を通して、その特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし、家庭や地域での生活を含めた園児の生活全体が豊かなものになるように努めなければならない。

文部科学省（2017）、厚生労働省（2017）、内閣府（2017）を基に筆者が作成

姿を伸ばすところから始めることができるようになる可能性が示された無藤（2018）。このことは、就学前教育での育ちが小学校教育での学びの基礎となることも示唆している。

また、環境を通して行う教育・保育についての記述が３法令の中で記されたことも重要な点である。このことに関しては、それぞれ第１章で記されているため、表１では３法令で示されている第１章について示す。なお、表１は、３法令を基に筆者が作成したものである。

表１によると、３施設ともに環境を通して行う教育・保育について示されている。ここで、就学前教育という表記について。就学前教育とは、就学前の年齢に該当する子どもたちに対する教育を示している。就学前保育、幼児教育等の表記も検討したが、保育所における保育とは養護と教育が一体となって行われるものであることを踏まえ、本研究においては全て就学前教育という表記で統一するものとする。さらに、３施設に通う年齢にあるものを示す表記は「幼児」「子ども」「園児」というように様々であるが、本研究では全て「子ども」で統一するものとする。

第２章　「10の姿」の概要

この章では「10の姿」について論じていく。「10の姿」とは、３施設でのふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、就学前教育において育みたい「資質・能力」が育まれている子どもの具体的な姿であり、特に５歳児後半に見られるようになる姿である。しかし「10の姿」は、５歳児になって突然現れるものではない。第１章でも述べたように、乳児期からの教育の積み重ねによって見られるようになる姿である。

無藤（2018）によると、実際の教育では「10の姿」が到達すべき目標ではないことも保育者や教師は理解しておく必要があると述べられている。就学前の姿は、乳児期からの教育の積み重ねの結果ではあるが、育っていく段階の途中にあることに留意することが重要である。途中段階にあることが分かると、指導の方向性が明確になり、小学校教育でも継続した指導が期待できるようになる。

５領域の編成　就学前教育では、乳幼児期に経験してほしい事柄として「健康・人間関係・環境・言葉・表現（以下５領域）」から成る５つの領域を示している。３法令では、子どもが生活を通して

発達していく姿を踏まえ、３施設での教育において育みたい「資質・能力」を子どもの生活する姿から捉えたものを「ねらい」とし、それを達成するために保育者や教師が子どもの発達の実情を踏まえながら指導し、子どもが身に付けていくことが望まれるものを「内容」としている。そして、「ねらい」と「内容」を子どもの発達の側面からまとめて５つの領域を編成したものが５領域である。しかし、子どもの発達には様々な側面が相互に影響し合っているという点には留意する必要がある。したがって、各領域は子どもが３施設での生活全体を通して様々な経験を積み重ねる中で相互に関連し合うことに留意した上で保育者や教師は指導を行うことが求められる。

「10の姿」と５領域の関連性　前項で述べたように、就学前教育では、乳幼児期に経験してほしい事柄として「健康・人間関係・環境・言葉・表現（以下５領域）」から成る５つの領域を示している。一方、乳児期は発達が未分化なため、身体的・社会的・精神的発達の基礎を培うという観点から、５領域ではなく「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものと関わり感性が育つ」の３つの視点から整理されている。これらの視点が、後の５領域につながることを乳児保育にあたる際には意識しておかなければならない。そこで、図１で３つの視点と５領域とのつながりについて示す。なお、図１は茶々保育園グループ社会福祉法人あすみ福祉会編（2019）を基に筆者が作成したものである。

「10の姿」については図２で示す。なお、図２は無藤（2018）を基に筆者が作成したものである。

「10の姿」とは、就学前教育が教育として意味を成すために、卒園するまでに、どのように育ち、どこまで育ってほしいのかの目途をイメージする必要があるという考えの下、示されたものである。「10の姿」が示されたことにより、保育理念もそれぞれ異なる３施設における就学前教育の共通性が確保され、小学校教育へと引き継ぐことが可能になった。このことにより、小学校教育では、子どもの育ちについてある程度の育ちつつある姿を期待し、その部分を伸ばすことから始めるというこ

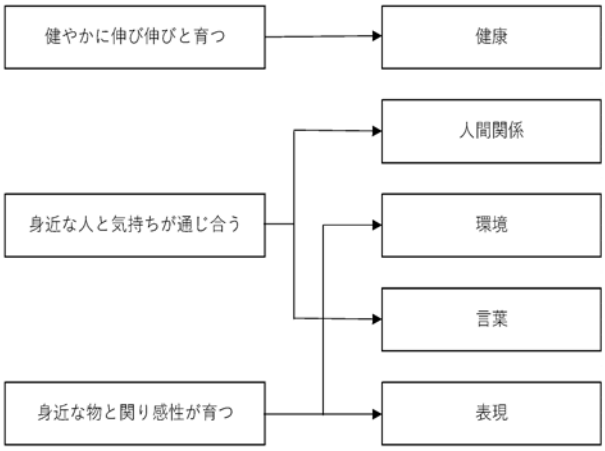

図１　３つの視点と５領域とのつながり
茶々保育園グループ社会福祉法人あすみ福祉会編（2019）を基に筆者が作成

図２　「10の姿」
無藤（2018）を基に筆者が作成

とが可能になったのである。しかし「10の姿」は、指導の方向を示すものであって到達目標ではないため、小学校教育でも継続した指導を重ねていくということに留意しておく必要があり、このことは就学前教育と小学校教育との連続性も示唆している。

第３章　「10の姿」を視点とした遊びの分析

第２章では「10の姿」と５領域について論じてきた。そこで、第３章では「10の姿」が就学前教育でどのように現れ、実現されているのかについて遊びの分析による考察を行う。その際、３施設で共通して見られる遊びに着目し、遊びの中で見られる子どもの姿を書き出していく。書き出されたそれぞれの姿に対し「10の姿」のいずれに該当するかの判断に基づく分析を行い、得られた結果に対して考察する。また「10の姿」は年長児に対する成長や期待を整理したものであるため、本研究においては年長児に焦点をあてていく。

遊びの選び方　本稿では、３施設で共通して見られる遊びとして砂場遊びに着目した。砂場遊びを選んだ理由は、殆どの３施設で見られる遊びであること、設定保育の時間以外の自由な時間にも見られる子どもの自発的な遊びであると考えられるためである。さらに、ここではFulghum（2016）についても触れておきたい。Fulghum（2016）は「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」[1)]と述べており、その著の中で「何でもみんなで分け合うこと、ずるをしないこと、人をぶたないこと…（以下省略）[1)]」を述べている。このことから、砂場遊びには就学前教育を通した子どもの姿が多く含まれていることが推測される。したがって、本稿では年長児の砂場遊びに着目していく。

砂場遊び　前項でも論じたが、砂場遊びには様々な要素が含まれている。手で砂の感触を味わうことから始まり、砂を使って何かを作るためにスコップや型抜きといった用具の扱い方も知る。玩

具の取り合いで友達とトラブルになる経験から葛藤することもあるかもしれない。さらに、乳児期には乳児期なりの、幼児期には幼児期なりの砂場遊びの楽しみ方がある。先述したが、本稿では年長児の砂場遊びに着目するため、乳児期の個々の遊びではなく、目的をもって集まった集団での遊びを想定して論じていく。なお、筆者は2017年３月までＫ県のＡ保育所にて９年間保育士として勤務しており、本稿で書かれている砂場遊びでの子どもの姿は、筆者が保育士として勤務した９年間の中で観察された姿である。また、本稿ではプライバシーへの配慮から、個人が特定されないよう子どもの氏名を使わない書き方をしており、Ａ保育所の施設長に対しても、本稿において子どもの姿をエピソード分析のために使用することの了承は得ている。

次に「10の姿」での分析を行う前に、砂場遊びでの子どもの姿を５領域でも捉えて分析した結果を表２で示す。

表２は、環境に該当するものが少ないことに対して、言葉に該当するものが多いことが示している。砂場という言葉から、戸外を連想するため、自然等の環境に該当するものが多いと予想していた。言葉に該当するものが多かった理由として、年長児の遊びは言葉を使ったやり取りが盛んに行われることが挙げられる。しかし、言葉のやり取りは乳児期からの教育の積み重ねで語彙数をその成長とともに増やしていった結果であることを理解しておく必要があると考えられる。一方、５つの領域全てに該当する子どもの姿は見られなかったが、重複しているものも見られたことから、子どもの発達は様々な側面が絡み合い、相互に関連し合っているということが確認された。

次に、表３において砂遊びでの子どもの姿と「10の姿」について分析した結果を示す。

表２　砂場遊びでの子どもの姿と５領域との関連

		健康	人間関係	環境	言葉	表現
1	水や砂の感触を味わう	○		○	○	○
2	玩具の貸し借りをする		○		○	
3	友だちと協力して穴を掘ったり山を高くしたりする		○		○	○
4	用具を使って穴を掘ったり山を作ったりする	○		○		
5	砂をケーキに見立ててごっこ遊びをする		○		○	○
6	友だちと共通のイメージをもって遊ぶ		○		○	○
7	型を抜くために、力の加減をする	○				○
8	自分がイメージしたことを表現する	○			○	○
9	玩具の取り合いを経験する		○		○	
10	玩具を譲る		○		○	
11	自分の思いや意見を言葉で伝える				○	
12	役割分担をする				○	
合計		4	6	2	10	6

表３　砂場遊びでの子どもの姿と「10の姿」との関連

		健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり	思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現
1	水や砂の感触を味わう	○					○	○	○	○	○
2	玩具の貸し借りをする	○	○	○	○	○	○			○	
3	友だちと協力して穴を掘ったり山を高くしたりする	○	○	○	○	○	○			○	○
4	用具を使って穴を掘ったり山を作ったりする	○	○	○			○			○	○
5	砂をケーキに見立ててごっこ遊びをする	○	○	○			○		○	○	○
6	友だちと共通のイメージをもって遊ぶ	○		○	○	○	○			○	○
7	型を抜くために、力の加減をする	○					○		○		
8	自分がイメージしたことを表現する						○			○	○
9	玩具の取り合いを経験する		○	○	○	○	○			○	
10	玩具を譲る		○	○	○	○				○	
11	自分の思いや意見を言葉で伝える		○	○	○	○				○	○
12	役割分担をする		○	○	○	○	○			○	
合計		7	8	9	7	7	10	1	3	11	7

表３によると、「自然との関わり・生命尊重」に該当するものが少ないという結果が示された。一方で、言葉による伝え合いや思考力の芽生えに関して該当するものが多かった。これは、思考する際も言葉を用いているためであると考えられる。それ以外にも自立心や共同性といった社会性に該当するものが多かった。５領域と砂場遊びとの関係について示す数人の年長児が砂場で水を流して遊んでいる場合、水や砂との感触という環境の領域との関わりが考えられる。また「10の姿」すべてに該当するものはなかったが、「友だち」という言葉が含まれる項目において、重複するものが多く見られるという結果が得られた。また、５領域と同様に、言葉に関する子どもの姿が多く確認された。

５領域と「10の姿」の分析結果から、両方とも言葉に関連する姿が多く確認された。このことは、年長児が言葉を使用することで遊びを展開し、他者との関係を構築し、思考力を高めていっていることを示唆している。しかし、言葉の獲得は乳児期からの教育の積み重ねであり、それぞれの領域や姿は、互いに影響し合って総合的に育っていくものである。保育者や教師はそのことを理解し、教育を行っていく必要がある。

第４章　まとめ

本稿では、就学前教育が「10の姿」を実現しているのかの検証を行うために、具体的にどのような就学前教育での子どもの姿が見られるかについて論じてきた。

まず第１章では、現在の就学前教育の概要について論じた。その結果、就学前教育と小学校教育との連続性と乳児期からの教育の積み重ねの重要性が示された。

次に第２章では本稿のキーワードでもある「10の姿」について論じた。その結果就学前教育と小学校教育との円滑な接続のために「10の姿」で子どもの育ちを捉えることの重要性が検証された。また、これまでの５領域と「10の姿」との関連性も明らかになった。

第３章では、就学前教育の活動例として砂場遊びを取り上げ、砂場遊びでの子どもの姿を５領域や「10の姿」を分類、分析を行った。その結果、言葉に関する項目でいずれも該当するものが多く確認された。このことから、年長児は言葉を用いて遊びを展開し、思考力を高め、友達との関係を構築し、維持していこうとしていることが示された。また、「10の姿」や各領域が相互に関連し合っているということも確認された。

本稿を通して、就学前教育において子どもの姿を具体的に捉えるためには「10の姿」が有効であることが検証された。本稿で取り上げたものは砂場遊びという１例だけであったが、現在の就学前教育が「10の姿」を目指して行われていることも確認することができた。一方、砂場という戸外での活動にも関わらず、領域「環境」や「10の姿」の自然との関わりに対しては、筆者の予想に反する結果となった。このことは、本稿の分析方法が、筆者単独で行っていることによる結果だと考えられる。このように、環境や自然に関する項目の偏り等が見られたことから、子どもの姿を捉える際には、客観性が必要であると考えられる。そのため、今後は様々な視点から子どもの育ちを捉えられる保育者や教師は研修を行い、子どもの育ちについて話し合う機会が作られることが望まれる。

引用文献

１）Robert Fulghum.（2016）. *人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ*（池央耿, 訳）：河出書房新社.
（Robert Fulghum.（1986）. *All I Really Need to Know I Learned in Kindergarten*. Villard Books.）

参考文献

厚生労働省.（2017）. *保育所保育指針*：フレーベル館.

文部科学省.（2017）. *幼稚園教育要領*：フレーベル館.

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター.（2015）. スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かるスタートカリキュラムスタートブック.

無藤　隆.（2018）. *幼稚園保育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領　３法令　すぐわ*

かる　すぐできる　おたすけガイド：ひかりのくに株式会社.
内閣府・文部科学省・厚生労働省.（2017）. *幼保連携型認定こども園教育・保育要領*：フレーベル館.
茶々保育園グループ社会福祉法人あすみ福祉会.（2019）. *見る・考える・創りだす　養成校と保育室をつなぐ理論と実践－乳児保育Ⅰ・Ⅱ*：株式会社萌文書林.

謝　辞

本原稿執筆にあたり、現場を退いた筆者に対し、子どもの姿の使用に際し快く応じてくださったA保育所施設長には心より感謝申し上げます。